



光原社
1947年



株式会社光原社



てくり

新しい情報を発掘することが目的ではなくて
デザイナーができる方法で、自分たちがよく知っている盛岡の普段を残したい。





赤坂環
木村敦子

きむら・あつこ

アートディレクター/グラフィックデザイナー。1968年生まれ、岩手県盛岡市出身。仙台市の印刷所デザイン課で版下作業や写植指定をみっちり仕上げた後、プロダクション勤務を経てフリーに。デザインとイラストの仕事をしてかれこれ20年。盛岡に戻ってからは「まちの編集室」を立ち上げ、編集者としても活動中。

あかさか・たまき

ライター。1968年生まれ、岩手県盛岡市出身。東京外国語大学中国語学科卒業。食品メーカーの営業を経て、出版社で飲食店向け経営専門誌の編集に携わった後、10年前に帰郷してフリーライターに。各種情報誌や自治体広報誌の企画編集・取材・執筆を担当。5年前からフリーランスの仲間たちとミニコミ誌「てくり」を発行。



創刊号「橋をわたって」
創刊「てくり」(2005年3月)



2号「メイメイインモリオの」(2005年11月)



3号「岩大の青春」(2006年5月)

てくりの足跡

2005年の創刊から年2回の刊行で、これまでに9号を発行。創刊号は3,000部、2号以降も2,000部を確実に販売している。毎回、編集部が自分たちの身近にある好きな/気になる人、モノ、コトを取材したいように取材し、書きたいように書く。最新情報や流行っているものではない、普段の盛岡の街がここにある。かつて城下町だった頃の街並や文化、風情が様々なところに息づく、どこにでもありそうで盛岡にしかない。そんな人と街の物語を伝える「てくり」の足跡。



4号「盛岡で、おあげんせ」(2006年11月)



5号「公園まで、お散歩は」(2007年8月)



6号「Old-Fashioned love 1 用の美」
古いもの今「茶室の」(2008年11月)



7号「アートの気配に
さそわれて」(2009年5月)



8号「そめXものづくり」(2009年11月)



9号「パンバグ、食べた」(2010年5月)



てくりのなか



写真は、基本的にネガで撮影。色は沈むが質感のある紙をあえて使用しているため、本紙校正は必須。いいデザインは「伝えることができること」だと木村が言うように、取材対象の普段の雰囲気をもそのままに伝えている。





盛岡に生きる自分たちの普段を、

「てくり」の巻末に、「あなたは、なぜここにいるのですか?」という連載がある。なぜ盛岡という地に住み暮らすのか、職業も年齢もバラバラな三人に聞くというものだ。創刊号から続くその連載を始めたのは、「自分たち自身ははっきりとわからない、盛岡の何がいいのかを知らなかったから」と赤坂環と木村敦子は話す。

二人とも盛岡生まれの盛岡育ち。それぞれ仕事を始めてから、東京や東北各地を経て、盛岡に戻ってきた。「てくり」が始まって3年目、創刊号は初版1,000部が一月で完売。増刷して合計3,000部を売った。前号の売上を次の印刷費にする方法で現在まで続けている。「盛岡以外のいろいろな地方都市にも住んで、全国が

どんどん画一化していくことに危機感がありました。郊外型になり、地元の商店街はシャッター街になってしまっている」なか、自分たちの知っているようで知らない地元盛岡の普段を残したい、伝えたいということが、始めるきっかけにあった。ただ、自分たちは「盛岡ラブ」のような熱烈な人間ではない、とも言う。「好きで居心地がいい、くらいな感じかもしれない。でも、その距離感が押し付けがましくない誌面を作って、地元をはじめ全国で読んでもらうのにちょうどいいんじゃないかと」。

かつて盛岡の街は城下町であり、職人や商人の街でもあった。「鍛屋町」「材木町」「鉦屋町」に「油町」など、今も名前にその記憶をとどめているものの、

自分たちにできることで伝えること。

現在は地名との関係性は薄れてしまっている。しかし、その街並や日常に残った文化の香りは、盛岡の人びとに浸透している。「てくり」は、そうした日常にあるデザインのエッセンスみたいなものを見つけて誌面に落とし込んでいる」のだと木村は言う。「てくり」が残り、伝えたいという普段の盛岡には、たしかに日常に埋もれて気づかないデザイン的要素が多く存在している。例えば、街を歩けば見かける書き文字や二百年近く続く小さな商店の包装紙の斬新さ、名産南部鉄器のフォルムの美しさ、気づくとどこのお店にも絵が飾ってあることなど。行政や観光政策のように、大げさにデザイン都市や芸術の都だと盛岡を讃えるのではなく、たまたま自分たちがデ

ザイナーやライターだったからこそ気づく日常の美的要素を抽出し、物語として彼女たちは伝えている。そのためには冊子、紙である必要があった。「モノでも街でも、愛着を持つためには“佇まい”が必要だと思う。手触りや匂い、ネガフィルムの色の感じ、些末かもしれないけれど捨てられないこだわりです」。

創刊当初からメンバー全員が女性。現在は4名だが、それぞれが母親になり、「子供たちに自分たちの生まれた街はこんなところだったと、次の世代に伝えていきたいという想いがあります。大人になって外に出て、自分の、また両親の故郷、盛岡はやっぱいいと思ってほしい」。盛岡という街の記憶が、こうして全国へと伝わり、残っていくのだろう。



盛岡市内で見ることのできる日本のデザイン。セービング南部鉄器店「鍛冶」の鉄瓶/右ページ左上から/バス停看板「盛岡バスセンター」の看板タイポグラフィ/「東屋」の喫煙/同じく「東屋」の店内喫煙、創刊号の表紙デザイン/「田舎のデザイン」/「田舎のデザイン」の感元として知られ、今は民芸店である「光原社」のロゴ/「正食普及会」のアルカイックスマイルマーク